

年長児の主体性を育む活動のあり方

—異年齢保育における協同的な行事の取り組みを通して—

明星大学教育学部教育学科 特任准教授 北相模 美恵子

Activities to foster the independence of older children: Collaborative event initiatives in Multi-age Classrooms in Early Childhood

Kitasagami, Mieko

キーワード：異年齢保育・主体性・協同的な行事・人間関係

1 問題と目的

本研究は、年長児の主体性を育む活動のあり方について、異年齢保育における協同的な行事の取り組みを分析することによって明らかにしていく事を目的とする。具体的には、異年齢保育の中で年長児が中心になって模擬店の様なお店を開く「おみせやさんごっこ」という行事の実践を、人間関係の視点で考察しながら研究対象としていく。この行事は、年長児が目的や見通しを持ち、実現に向けて他者と関わりながら協力・工夫しあい主体的に準備に取り組み自ら楽しむと共に、年下の子たちを招待し当日のやりとりなどの中で充実感や達成感を感じる事ができるものである。これは、自己の成長や自分自身への肯定的な感情を育む「協同的な行事」であると考えている。現代の子どもについては主体的に活動することをためらう姿が保育現場から指摘されている。この問題については、自分自身で考えたことを主張し、実現するために人と協力しながらやり遂げていく事などの主体性を育成していく事が重要であると考えられる。しかし、保育におけるどのような活動の中でその力が育っていくのかは、まだ明らかになっていない。そこで、年長児の主体性は「人と人とが密接に関わりあい、しかも多様な人間関係の中においてこそ育まれていくのではないか」という仮説のもとに、実践の子どもの姿などから検証していく。

構成としては、第1章で概念を整理し定義付けを行い、第2章において研究対象のこれまでの経過やクラス状況について説明をしていく。第3章では、実践事例をあげ分析をしていく事で、子どもにとって必要と思われる要素と、保育者の姿勢や働きかけとして求められる要素について明らかにしていく。その上で、更に主体性を育む活動のあり方について考察し第4章でまとめとする。

本研究においては、「協同的な行事」の実践を研究することで、現在の子どもたちに見られる姿について、保育内容のあり方を明らかにしていく事とする。

まず、本研究で重要となるいくつかの言葉の意味について考察し、定義づけしていく。

①「協同的な行事」

「協同的」について検索してみると、以下の様に定義づけられている。保育小辞典(2006)によると、「協同的な学び」として「幼稚園等施設において、小学校入学前の主に5歳児を対象として、幼児同士が、教師の援助の下で、共通の目的・挑戦的な課題など、一つの目標を作り出し、協力工夫して解決していく活動」と述べられている。更に「前提として模倣する力や他者の心を理解する力を基に子ども同士で積極的にやり取りをするようになっていく」こと、「その上で、『協同的な学び』が成立するには、個々の着想や工夫を認めあい、共有しあう仲間(集団)が必要」とされている。この中で注目すべきこととしては、「共有しあう仲間の存在の重要性」が述べられている事である。年長児においては大人との関係性のみではな

く、子ども同士の関係性によって認め合い共有していく存在の重要性が挙げられている。更に注目すべきは、「幼児同士が、教師の援助の下で」ⁱと保育者の関与が重要であることが強調されている点である。保育用語辞典(2016)においては、「協同する経験」として「人とのかかわりにおける様々な経験が希薄になってきている現代の子どもたちの抱える育ちの問題を背景とし、幼稚園・保育所等において、子どもたちが共通の目的を生み出し、その実現に向けて協力し、工夫しあっていく経験の必要性が改めて重要視されるようになってきている。」とされている。そして「協同する経験」を目的とする保育実践においては、「留意されるべきこととして、ここで求められている『経験』とは単に一つのテーマや目的を外側から与えられて『協力し合う』という形を『体験』することとは質の異なるものである」という点が挙げられている。更に「個々の子どもたちが、人とのかかわりを深めていく過程のなかで、それぞれに自分の思いや個性を発揮できるようになったり、他者の思いや個性に出会っていくという経験を重ね、そこで共に取り組みたい事を見つけ、共通の願いや目的を見出していくという、自分たちの必然性から生まれた『目的』に向けて、自ら力を合わせ共に取り組んでいくという過程を意味しており、そこでの経験の内実こそが意味のあるものと考えられている。」ⁱⁱとされている。この中で注目すべきこととしては、前述のものと同じように他者の思いや個性と出会い、自ら力を合わせていく仲間の存在について述べられている点である。更に述べられているのは体験と経験の相違であり、より子ども自身の主体的な活動の過程を大切にすることの重要性である。では、保育者の関わりについてはどの様に述べられているのであろうか。保育小辞典(2006)においては、保育上の課題として「仲間関係を構成するメンバーそれぞれの視点から行動を計画し、問題解決に協同して取り組むような仲間(集団)関係づくりが大切な保育の課題となる。」とされ、また、「適切な指示や支援、行為への見通しをもたせるなど、保育者からの指導が必要になる。」ⁱⁱⁱとも言われている。一方、保育用語辞典(2016)では、「子どもたち自身が人とのかかわりに向かおうとする姿勢や、そこで出会う様々な他者との葛藤を調整していく力、そしてそのなかで互いの自己発揮を支えあっていく関係を、長いスパンで見通しつつこまやかに支えていく保育者の援助が必要となる」^{iv}と述べられている。両者を比較した場合、子ども集団が必要であると考えている点は共通している。しかし、保育上の課題については、保育者の関わる視点について違いが感じられる。後者は、外側から与えられるものではなく、子どもたち自身が他児との関わりの中から目的等を見つけ出すことを重視し援助する事が大切だとされている。一方前者は、保育者の指示・支援などの指導に重点が置かれた、より保育者の直接的な指導の必要性が述べられている。子どもたちの年齢や集団の状況によって、その都度保育者の関与の仕方は変わってくるが、保育者が「協同」をどう捉えるかということは、保育の活動や留意点に大きくかかわってくる問題だと言える。本研究では、「協同的であるということ、それを育む保育士の関わり」について「5歳児後半の子どもたちの協同的な活動とは、子ども同士が他者と出会い、個々に違う存在であると知った上で自分と他者の思いや個性を受け入れる経験を重ねる中で、共通の願いや目的を見出し、力を合わせて取り組んでいくものである。その際の保育者の関わりとしては、子どもたち自身が自ら他児と関わり、目的を見つけ出すこと、共に工夫し協力し合うことを支援することである。」とする。

「行事」については、保育小辞典によると「一定の時期に目的を持っておこなう催しのことを行事という」[単調になりがちな園生活に変化と秩序を与え、子どもたちの精神的、身体的成長や発達、更には仲間意識やクラス、園への所属感の高まりを期待することができる]「子どもを追い立てる行事保育にならないように、常に行事の意味を理解し、主体的にとりくみ、仲間と協力してつくり上げることができるような充実した行事の取り組みを計画したい」とされている。この行事という用語の意味の中に、一定、協同的な要素も含まれているように思われるが、危惧されている様に保育現場で保護者等に見せるための行事に追われるケースもよく見られる。実際の行事でも運動会・発表会などにおいては、近年、できる・できないという結果にこだわる子どもや保護者の姿もある。行事の中でも特に優劣を競うことや、できるようになった結果を見せることが主たる目的となっている行事との違いを表すため、本研究では前述の様な、より子どもの主体的な活動を目指し行う行事を「協同的な行事」としていく。

② 「異年齢保育」

近年、異年齢保育を行っているという園が増えてきている。しかし、その内容についてはそれぞれの認識で述べられており、一部の時間を他年齢の子と交流するもの、基本的な生活全てを一緒に過ごすもの、対象年齢も乳児を含むものや幼児のみのもの、年中年少のみのもの等、様々である。成り立ち自体に注目し宮里(2014)が分類したように、条件的に同年齢保育が成立しえないために行われる「条件的異年齢保育」と、積極的に敢えて異年齢児での生活集団を形成する「理念的異年齢保育」^vに分けて考えられてきた。その後、実践研究が積み重ねられる中で、川田(2018)は「『異年齢』であるのは『個人』の尊重を徹底しようとしたから」であり、「(その)実践が、結果として『異年齢』になることは、子どもが『自分はこの場所においてよい存在なのだ』という基本的な自己信頼に関わっているからである」^{vi}と述べている。保育形態としての異年齢保育研究の上に立ち、その実践が子ども一人ひとりをいかに尊重していくものになっているかが重視されるようになってきていると言える。伊藤(2018)は、異年齢保育を実践している保育者が参加した研究集会の報告書において「異年齢・年齢別という枠をこえて、一人ひとりを大切にする保育とはどういうことかを語りあうことが大切」という発言を取り上げ「一人ひとりの育ちによりそう保育」^{vii}を考えていく事の重要性を述べている。一人ひとりの尊重が重要視されることの背景には、そうなりえていない社会状況が存在していると思われる。子どもの貧困や虐待問題等子どもが健全に育っていくための環境が整っていないと同時に、子どもだけが貧困であるわけではなく保護者の環境も悪化し子どもを尊重した生活を送りたくても送れない現実がある。できること・できないことなどの結果に、敏感に反応し意欲を失い自分自身を信じ肯定することができない子どもたちが増えている。その中で実践を行っている保育士が、一人ひとりの尊重を目指し、語りあい考えていく事の重要性を述べているのである。どの子も「その子らしい育ち」を大切にされる保育として、異年齢保育での育ちを考察していく事が必要なのではないだろうか。北相模(2015)は保育者の語りの分析から、異年齢保育における5歳児について「5歳児自身がこの集団の中で周囲から必要とされ頼られる存在である」と感じていることが更なる意欲につながっていき、子どもたちの中に「達成感・自己肯定感・自分を誇らしく思う気持ちを個々に育てていこう」^{viii}としている保育者の意識を見出している。保育所保育指針においては、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿として、主体的に関わり様々な活動を楽しむことや協同して友だちと関わる事が挙げられている。異年齢保育の中で育みたい力として考えられてきたものと、共通している点も多いように思われる。更に、「個人が真に尊重されるコミュニティで、子どもはむしろ『他者』への関心を開く」^{ix}と川田(2018)は述べている。自分自身が大切にされていると実感する中でこそ、子ども自身が周囲を意識し、取り入れることができるようになるという事であり、保育の中で一人ひとりが尊重される経験を積み重ねる事が、子どもたちが育ちづらくなっている現在の問題点を改善していく事に繋がるのではないだろうか。

本研究においては、生活集団を敢えて異年齢で形成する「理念的異年齢保育」の中でも、より年齢幅の大きい多様な人間関係が存在する1歳児から5歳児までの異年齢保育について考察していく。

③ 「主体性」

新版保育用語辞典(2016)によると「主体性」とは「他によって導かれず、自分の感情・思考を柔軟にコントロールし、自ら行動する性質を指す。主体性のある人は社会において生き生きと自分らしく生活し、精神的に健やかである。」^xとされている。また、保育用語辞典(2015)では「主体性は『主体としての、みずからの活動の認識と意識づけ、そして活動のコントロール』の問題として扱われてきている。」とされ、更に、「生」を選ぶ事ができずに受け身で誕生してきた人は、全面的に受け入れられる経験を必要としていることが述べられ、「このような経験を重ねて、人との間で『この行為の、この感情の、この考えの主人公は私である』という実感を持ち、この私に責任をもてるようになることを、主体性の獲得ということが出来る。」^{xi}とされている。つまり、自分自身の感情や思考をコントロールし自らの主人公になっていく事ができるように、全面的に受け入れられる経験を重ねていく事が重要であると言われている。

保育内容の人間関係分野においても、子どもを主体として育てていく事が重要視されている。古賀(2016)は「乳幼児期は…子どもがみずから周囲の環境に手を伸ばしてかかわり、『おもしろいな』『もっとこうしてみたいな』と心を動かして遊ぶことを通して、発達に必要な体験を得ていく特徴があります。そこで、保育の基本は、主体としての自己が十分に発揮されるようにすることになります。」^{xii}と述べている。また無藤(2016)は、意欲や興味・関心に加え粘り強さや挑戦する気持ちなどの育成を重視する必要性を述べている。この力は非認知能力の重要な要素とされ、主体的に生きていく力と密接な関係があると考えられる。更に、育成支援の工夫として、コマ回しの活動を取り上げ「意欲や興味をもつためには、保育者が教えるより年上の子どもがじょうずに回すのを見て憧れの気持ちを抱かせるのが効果的であろう。」と述べている。また、「文字に関しては、お店ごっこでメニューや看板を作成したくなることがよくある。文字が書ける子どもと作成したり、まだ書けない子どもが書ける友だちに教わったりして自然と学んでいく。保育者は、『もっと、本物のお店らしくしたい』という気持ちをじょうずに引き出していけば、そういった活動へと展開していくだろう。」^{xiii}と述べ、具体的なあそびとしてお店ごっこを取り上げている。

以上を踏まえ、A保育園において年長児を中心として取り組まれた「おみせやさんごっこ」の事例を研究していく中で、年長児の主体性を育む活動のあり方について考察していく。

2-1 方法

年長児が中心となって取り組まれた協同的な行事「おみせやさんごっこ」の実践を、担任4人がふり返り論議をした上で記述された資料をもとに分析をしていく。これは、それぞれの保育士が自分の関わった実践部分について、自身の迷いや感想を率直に記述しているものである。取り組み過程において「子どもたちの姿からどの様な育ちが読み取れるか」「保育士の取り組みは、どの様な意図を持ち、働きかけがされているのか」を視点として分析する。活動内容を構成した保育士が子どもの姿をどう捉え論議し表現しているかを考察することで、子どもたちにとってこの活動が持っている意味と、必要と思われる活動のあり方について考察していく。

この資料は、対象園の年間総括会議のために記述されたものであり、倫理的配慮を行った上で、園長の許可を得て使用した。

2-2 クラス・行事の概要

・クラスの概要

対象園はA市にある私立の認可保育園である。1歳児から5歳児までが一日を通して同じ生活空間で暮らす異年齢保育を20年以上前から行っている。それぞれの発達に必要な保育を、年齢の枠を超えて行うことができるとともに、年下の子にとっては、年上の子の姿を間近に感じ見よう見まねしながら憧れを持ち育っていく事ができるとされている。また年上の子にとっても、年齢幅の大きい多様な子どもが存在している集団の中で、他児を受け入れるのと同じように、自分の個性を受け入れ自分自身を好きになり周囲から認められ安心して暮らすことということが成り立ちやすい環境だと考えられている。どの子にとっても居心地の良い居場所となる環境となり、一人ひとりが尊重され自分の力を発揮できることを目指し実践が積み重ねられている園である。本研究では20年以上異年齢保育をリードしてきた保育園について事例を基に分析することで、その理論的検証を行う事とする。A園の1歳児から5歳児までの定員は200名弱で、40名弱ずつの5クラスに分かれている。1つのクラス中には4つのグループがあり、各グループは保育士1名が各学年の子ども2名ずつ計10名を担当するグループ担当制をとっている。幼児に対しての担当制は乳児のそれとは意味合いが違い、生活行為の確立等の要素よりも子どもの気持ちの居場所である

安心感を意識したグループ担当制といえる。1クラスの保育士数は、担任を持つ者が4名、クラスの運営と休暇補充等を行う者1名、他に交代勤務の補充と加配児対応のための短時間職員4～5名が配属されている。実践当時、担任4名の保育経験年数は、20年以上が1名、10年1名、5年1名、1年1名であった。

・クラスの状況と、行事取り組みのねらい

クラスとしては、大半の子が0歳児・1歳児から継続して在園しており、兄弟が在籍し卒園している家庭も多く、長いスパンでの関わりが可能となっている集団であった。しかし年長児に関しては、1名が4歳児年度途中の入園であり、年長進級時に2名が転園するなど変動の多い学年であった。6名の年長児集団は2～3人ずつで固まってあそんでいる事が多く、仲は良いが小さい集団の中で過ごすことを好んでいるようであった。大人数になると自分の考えを積極的に言おうとする姿は少なく、他の子の意見に何となく同意しているように感じられている点も保育士は気にしていた。また、イメージの共有がしばらく自分の考えに固執する、人との関わりが少なく一人の世界に入りがちになるなどの特性を持った子どもおり、色々な場面での人とのやり取りや感情の交流を経験して欲しいと保育士は考えていた。年中児は8名であったが、複数の特別な配慮を必要とする子どもが在籍しており、集団としては幼く次年度を見通して年長との関わりを例年以上に意識していきたいと保育士は課題を持っていた。

クラスの状況を踏まえ、保育士はこの年度のクラス目標を「やってみたいな！をいっぱいみつけよう！～自分で選ぶ力を大切に。大人は種をまくサポーター～」(保護者向けのクラス便りより)としていた。異年齢保育の中で、これまでの活動や年上の子どもたちの姿をその年齢なりの理解力で受けとめ、自分の中にイメージを広げてきているであろう子どもたちを信じ、主導権を子どもに渡していこうということであった。具体的にはそのイメージをためらいなく表現し実現していけるように大人は、子どもの主体的な表現や活動を実現することを目的として、保育内容を考えていこうとしていた。それを保育士は「(他のクラスの実践を聞いて)どちらかと言うと、大人がお膳立てを入念にして『やらせてあげている』という感じがしないでもなかった『ほし(クラス名)のおみせやさん』を、年長児がやりたいと思うことを実現するお手伝いを大人がするという方向に転換してきた、今年の実践でした。年中児にも、お手伝いという形で気持ちを膨らませて欲しいという点も、確認してのスタートでした。」と述べている。前年度までも、保育士の意識としては子どもの主体性を大切に考えて取り組まれていたが、他の行事との兼ね合いなどから時間の制約があり、保育士がこんなものをやりたいのではないかと考え、ある程度予想して準備をしながらすすめている状況であった。しかし、他クラスの「子どもの発案を丁寧に拾い実現していく中で、粘り強くやり遂げていく子どもの姿を引き出している実践」を聞く中で、もっと、子ども主体にすることが大切なのではないかと話し合われた。その時のことを「毎年あれをやらなきゃ！これをやらなきゃ！と大人が(必死に動いていて)大変なイメージだったおみせやさんごっこだが、(他クラスの)話を聞き、なんだか楽しそうだな、楽しいことなんだよな。もっと、子ども主体でいいのかな。など色々な思いが込み上げてきて、ほし組でもお店屋さんごっこを楽しもう！がスローガンになっていった気がする。」と保育士は述べている。

3 結果と考察

3-1 事例についての考察

実際の実践記録(201X年度 総括文章)より、異年齢保育における協同的な行事である「おみせやさんごっこ」の実践を「Ⅰ. 子どもの主体的な姿とそれに関する保育士の思い Ⅱ. 保育士の姿や思考」に分けて具体的に分析していく中で、年長児の主体性を育む活動のあり方について考察していく。

Ⅰ. 子どもの姿と、それに関する保育士の思い

① 自分ではできると容易に信じる事ができる姿

●事例・1 年長だから

(1回目のお店屋さんを行うための話し合いで)「で、今年はどうする?やれそう?」と試し気味に聞いてみると…。「うん。だいじょうぶ。だって、さくらさん(年長)だから」とRちゃん。続いて「さくら(年長)だから」とY君。この強い(自信の)根拠が「年長だから」という事であるのが、この異年齢保育の特徴だなあと思いつつ…

<考察>保育士は、日頃意見を積極的に主張することが少ない二人の自信にあふれた口ぶりに驚くと共に、これまでのおみせやさんごっこを用意し招待してくれた過去の年長児の姿を間近に見て参加してきたことが、この自信の根拠なのだろうと考えている。

② やりたい事のイメージを形成することが、より具体的に可能になる姿

話し合いを進める前に、保育士は例年並みから抜け出せず「どうしても大人のイメージは固定化されていて、レストランと売り物屋さんとアトラクション系かな」と考えている。

●事例・2 話し合い

「去年の年長さん、お店屋さん何してくれたっけ?」と聞くと「おもちゃ屋さん〜」「レストラン〜」「うめジュースも」「さかなつり」と口々に。「おもちゃ屋さんって何売ってたっけ?」には「ヨーヨー」「はなび」「いとでんわ」「マークのついたやつ(個人個人のシンボルマークを年長児が書いて、ラミネート加工をした名札のような物)」と次々に出てきました。…その記憶力の良さにびっくりするやら、印象深い行事になっているんだなあと改めて感じました。

<考察>前年度までの記憶をよく持っている子どもたちの姿が書かれており、印象深い行事になっていると言える。異年齢クラスで経験した4年分の活動が、それぞれの発達に応じた理解の中で年々書き添われて年長児としての行事を迎えていると考えられる。

●事例・3 星の図書館にしようと思ってるんだよね

Mちゃん「ほんをいっぱいつくって、ちいさいこによんであげたいの」
E保育士「どんな本作りたいの?」
Mちゃん「まだ、ほんのなまえはきめてないけど、ほんやさんのなまえはきめてるの。
うふふ、ほしのとしょかんにしようとおもってるんだ」

<考察>保育士は「なるほど。すごい。図書館も子どもからしてみれば本屋さんなんだね」と、その発想に感心して受け止めている。否定することなく受け止められて、子どもはためらいなく自分なりに持っているイメージを表現している様子が見られる。今までの経験から持つイメージに自分なりの工夫や発想を加えていく事が、年数を重ね多く見ている分、やりやすくなっていると言える。

③ 仲間関係の中でそれぞれの思いを出し合い話し合っ解決する姿

●事例・4 一緒にすればいいんじゃない?

この時点で絞られていたのは、レストラン、お菓子屋さん、絵本屋さん、おしゃれ屋さん、お花屋さん、わなげやさん、おもちゃ屋さん、お化け屋敷。6人しかいない今年の年長さん。でもどれも捨てがたい。まずは、「お化け屋敷は小さい子が怖がるし、わなげやさんでいいんじゃない?」なんて、子どもたちの中で一致。さあ困った。そこで「どんぐりむらのどんぐりえんみたいにいっしょにすれば?」とKちゃんとRちゃん。大人もアドバイスを入れつつ、でも自分たちで考えながらまとめていく。「レストランにおかしもだせばいい!」とお菓子屋さんがやりたいと一人言っていたSくん。「わなげやさんでオモチャがもらえる…?」とかすかにつぶやくYくんのアイディアから、景品がもらえるわなげやさん。これは、年中時代にやったバザーから思いついたのでは?「おはなは、おしゃれやさんでう?」

と何となく決まり「ほんやさんは、でんしゃのちかくのばいてんにする？」とRちゃん。「いいね！」とみんな。ようやく、なんとなく4つにまとまった。

<考察>「どんぐりむらのどんぐりえん」は、保育士がおみせやさんごっここのイメージを子どもたちが持つ手助けになればと絵本たてに入れておいた本だったと書かれている。決して子どもに任せきりではなく、保育士は先を見通して保育を構成しようとしているが、あくまで子どもたちの意見や発想が出るのを待ち、一人ひとりの意見が出ることに感動しながら見ている様子が伝わってくる。

④ 日常的に多様な存在に接している事が、受け入れられる人間関係の巾を広げ、自分自身にも変化をもたらしている姿

●事例・5 Mちゃんと年中児

お店が、レストラン・図書館・わなげやさん・おしゃれやさんの4種類に決まり、準備に入っていった。ほんやさんはMちゃんが一人で担当することになった。

本番は隣のクラスから本棚や椅子、テーブルを貸してもらい、図書館風に設定しようと相談した。Mちゃんだけでは難しいのは目に見えていた。しかし、前に年中にも手伝ってもらおうと言った時にMちゃんは「えーっ。ねんちゅうにもやらせるの?!」と散々言っていた経過があった。本番の開店準備を年中にも頼もうという時、Mちゃんが何というか少し、心配だった。Mちゃんは最初何か言いたげだった、しかし、準備を始めて色々なものを運んできたりしていたら「あーっ、RくとFくん(年中)がいて、よかった。いなかったらMだけでやらなきゃいけなかったんだよ～」と言った。自分に力があるだけに、人に頼るとか弱音を吐くとかが苦手なMちゃんだけど、とても素直な言葉だった。

<考察>保育士はMちゃんの課題を、自分の弱さを認めたり人に頼ったりすることができづらい点であると考えていた。息苦しそうに見えていたMちゃんが、この実践の中で自分より小さい子たちに協力してもらう事でMちゃんの気持ちに変化が見られた。

●事例・6 Y君の変化

Y君は小さい頃から目が合いづらく、一人のイメージの世界で独り言を言いながら戦いごっこをしている事が多い子だった。また、悪気はないのだが周りをよく見ないで1歳児とぶつかり転ばせてしまう事もあった。しかし、そのY君だが、1・2歳児に優しい声で丁寧にわかりやすく「こうやるんだよ。3かいてきるよ。あと、いっかい」等と言っていた。思いやりのある子どもに成長したなと感じた場面であった。

<考察>Y君の乳児期からの姿から、人との関わりに配慮が必要な子どもだと考え保育を重ねてきた経過がある。その中で小さい子にわかるように実際にやって見せるなどの工夫を自然にしている姿に変化が見られ、これは年齢巾のある集団であるからこそ引き出すことができていると言える。

⑤ 異年齢保育の中で、身近にその年齢なりの理解で感じ参加することを繰り返しているという事 小さい子たちの姿

●事例・7 お客の1・2歳児

H保育士と年長児Kちゃんの二人しかいないおしゃれ屋さんは大忙し。そんな中だが、なんだか忙しいのがまたうれしそうなKちゃんの姿や、お客さんの1・2歳児が衣装を着て可愛くポーズをとる姿にほっこり。例年は買ったものは持って帰れるものだから衣装を一生けん命自分のカバンにしまおうとする子もいたりしたが、ちゃんと説明するとお店に戻し、何度も色んな衣装を試着する姿があった。

<考察>1・2歳児もそれぞれがその理解の中で、この行事の雰囲気を楽しみ参加している様子が分かる。自我の芽生えや拡大の時期でもあり自分の思いで行動しようとする姿が出ているが、日常を一

緒に過ごしている年長児の優しい説明に気持ちを切り替えて次に向かう姿が書かれている。

●事例・8 年少R君の意欲

話し合いの時から、年少・年中児も雰囲気を感じて、ワクワク・ウロウロ。最初から雰囲気を感じていたために、お財布づくりを年中児に手伝って貰ったら大乗り気。T君はおうちでお財布を7個も作って来てくれました。年少のR君は「もうおみせやさん？」と昼寝起きに聞き、翌日には「おみせやさんだから、はやくいく」と言ってきかず、超早登園になったのでした。そして、当日（年長児の手助けに年中児2名が加わって）R君とF君がお店屋さんの側に来てくれたと思ってふと見ると、そこにはもう一人…年少のR君！年少児はお客さんのはずだが、そんなことはおかまいなし！というより純粋に「やりたい！やっていいんだ！」と思ったのであろう。あまりにも嬉しそうにお店屋さんをやっている可愛すぎる姿に、周りも何も言っていないし、ちょっとだけいっか、とそっとみていたH（保育士）であった。

<考察>行事の日にのみ招待されて参加するお店屋さんごっこは違い、事前の準備から間近で見ている事で、年少児もイメージを高め楽しみな気持ちを膨らませている。周囲もそんな気持ちを肯定的に受け入れている。年中児が参加することには認めがたい気持ちを持った年長児であったが、年少児の飛び入り参加には寛容である。昔の異年齢集団にはよく見られた「おみそ」への寛容さと同じように思われる。

●事例・9 Kちゃんと年中児のチームワーク

いざ、準備が始まると（緊張するといっていた）Kちゃんは一転！テキパキとお店を飾り付けはじめ、お手伝いの年中児R君とF君にも「Fくんは、ゆびわならべて！」「Rくんは、ゆびわはこんで！」と指示も出していた。それもちゃんとF君は几帳面に並べてくれることなど、それぞれの特徴を理解した上で的確に指示していた。そして、R君もF君もあっちがいい！など反論することなく、むしろすごく張り切った様子で「オッケー。まかせて」とKちゃんの指示に従っていた。なんて素晴らしい連携プレー！私が何も言わなくてもスムーズに準備が進んでいた。

<考察>日常の生活を共にしている異年齢保育の中で、年中児は年長のKちゃん存在を身近に感じ、あこがれの気持ちを抱いていることが伺える。Kちゃんは、年中児の二人の特徴をよく理解し、得意なことをそれぞれに割り振っている。お互いを理解し信頼関係が日常から築かれているからこそその姿であると言える。問題と目的の中で無藤があこがれについて述べている事を引用しているが、ここで挙げている事例との関係について、後に考察していきたいと思う。

II. 保育士の姿や思考とその考察

子どもの主体性を育む保育士の関わりについて、保育士の意識が分かる場面を取り上げていく。子どもの姿を評価する視点を保育士がどう持っているかという事が、子どもたちの活動のあり方に大きな影響を与えるのではないかと仮説を立て考察していく。

① 保育士同士が意思疎通を図り、共通の視点や課題意識を持ち、子どもに接しようとする姿

保育士は、子どもたちにどの様な活動を保障したいと考えているのかを丁寧に共有し、共通の視点で見ることや同じ方向性での関わりを行おうとしていることが述べられている。例えば事例・5で見られるように、保育士はこれまでの生活の中で一人ひとりの子どもを理解し、良い点を理解することはもちろん課題についても意識し、見通しをもって働きかけている。そして、実践を通して見られた子どもの姿からその行動の持つ意味をふり返り、保育士同士で確認し合う事を重視していると言える。この点は、ほかの事例にも共通しており、保育士の意識の土台として築かれている様子がある。

② 保育士同士が認め合い協力し、目標に向かって実践する姿

●事例・9 H保育士の振り返り文章より

今年子ども主体に話が進んで行った気がする。手づくり絵本に手づくり衣装にレストランの品も、ゼーんぶ子ども発案！だからこそ子どもの豊かな想像力や、色々な姿が発見できたのかなと思う。また、大人もそれぞれ色々あってなかなかみんな揃うことなくバタバタの中、ここまでは誰が話したからこの続きはお願い！と連携をとったり、自分が担当するお店じゃないものも、時間のある人が子どもと考えて材料を用意したり作ったり。忙しくない時期にとずらしたはずのおみせやさんごっこだが、なんだかやはり気が付けばあと(期間が)これしかないとなりバタバタ。…(中略)…いろんな大人がいろんな所で働いて一つのものができる。何人も大人がいるからこそその大変さはあるけれど、何人もいるからこそ色々な角度から子どもをみることができ、子どもの姿に気づくことができるのは複数担任のいいところだと思う。

<考察>保育士が交代勤務であることの影響が大きく、一人が連続して行っていく事が難しい状況の中で行事の準備を行っている。お互いが行ったことや子どもの姿を伝えあい、連携をとって活動を継続させ、子どもの発案を受け入れ発展させていこうとしている保育士の姿が書かれている。また、保育士自身もそれぞれが思いを出し認め合っている姿が記録の中にも多く残されており、お互いの思いを尊重し、複数の視点で子どもを理解していく事の意義にも確信を持っていると言える。

③ 保育士自身がイメージを持ち、保育への意欲が高まっている姿

●事例・10 ワクワクが止まらない

Kちゃん担当のおしゃれ屋さん。年長にどんなイメージなのか聞いてみると、可愛い服を作って、指輪やお花も作って…とイメージを膨らませる子ども達。私(H保育士)自身ちょっと(行事の分担などが)かぶっていて(負担感がありお店の担当を持たずに)全体の動きにつこうと大人の話し合いで決めていた。しかしおしゃれ屋さんの話を聞いているうちにどんどんイメージが膨らみ、「一緒に作りたい!みんながイメージするものを形にしていきたい」という気持ちが出てきて、「(洋服には)新聞紙よりもカラーポリ袋を使ったら…花紙やキラキラテープやスズランテープを使ってもいいかも。なかなか普段の美術で色々な素材を使いたいと思いつつも限られたものになっていたので、この機会に普段使わない素材をたくさん提供したい!触れさせたい!」と思いワクワクが止まらなくなっていた。…(中略)…どんな衣装が作りたいか一枚の紙に描いてもらった。描きあがった数々のデッサンたち。それがまた可愛くて、よく考えて描いているなど感じるものばかり。「はやくつくりたいなあ」という声も聞き、こちらまで楽しみになるほど。

<考察>H保育士は、保育士歴が浅く毎日の生活と行事に見通しが持ちづらい状態になっており、本人も含めてクラスで話し合い、敢えて担当からは離れ全体を見ていく中で負担感を軽減しようとしていた。しかし、子どもたちの次々に出てくるイメージを聞いているうちにそれを具体化していきたいという、保育士自身の意欲が湧きあがり「ワクワクが止まらなくなっている」ことが書かれている。保育士が主体的に保育に取り組むことができるのは、子どもの主体的な姿が見られ、それを更に一緒に楽しんでいきたいと思える事が一つの要素であると言えるだろう。

④ 子どもの持っているイメージを引き出し、尊重しようとしている姿

●事例・11 おしゃれ屋さん

おしゃれ屋さんをすることに子どもの発想で決まった。
 おしゃれ屋さんとは…なんだろう?例年やっている雑貨屋さんの感じかな?そしたら紙粘土でネックレスとか作って、ビーズもいくつか残っているしそれも使える!と、またもやこれも職員間で安易に考えていた。…(中略)…
 K保育士「みんなだったら、おしゃれ屋さんで何売りたい?」
 Mちゃん「うーん。ネックレス」

K保育士 よし来た！
 Mちゃん「おはなとか、はっぱでつくるの」
 Rちゃん「いいね～」
 K保育士 花？葉っぱ？今の時期にそんな可愛い花なんか咲いてないよ～！それ、絶対すぐに枯れちゃうじゃん！
 「ちなみに…紙粘土に可愛いビーズとかつけて、ネックレスとかにするのはどう？」
 Mちゃん・Rちゃん「あ～、それはいいや。」
 K保育士「そうか～」
 なんだか、職員の安易な考えを見透かされているよう。いや、むしろみんなちゃんと自分の中でどんなことをしたいのか、イメージをしっかりと持っていたのだ！すごい！本当に凄い!!!ただ、どうしたら良いの？と職員間で相談。

<考察>保育士は、これまでの経験から行事のイメージをしっかりと持っている子ども達だからこそ、去年度に人気のあった物を作ることに子どもたちも賛成するのではないかと考え提案をする。しかし、あっさりと「それはいいや」と却下されたことでどうしたらいいのか悩みながらも、子どもたちがイメージを持ち、それを主張できたことを喜んでいる。子どもの主張を大事にしようとしていることであり、保育士のイメージは見通しとして一定持ちつつも、子どもの思い・イメージを大切にしながら活動をスタートすることを何よりも尊重していると言える。「あーそれはいいや」とためらいなく言える子どもの姿は、大人の発想に何となく従うのではなく、自分がやりたいことを持っているからこそと言える。

●事例・12 電車屋さん

次は電車屋さん。私(K保育士)は電車屋さん自体が「???」どういうことなのだろう?と、Rちゃんに聞いてみる。すると、「ダンボールで～かいさつをつくってえ、きっぷかうところもつくるの。」なんか、意外!Rちゃんも自分の中でちゃんと電車屋さんのイメージを膨らませているじゃないか!Mちゃんは「きっぷはハサミで切ったりするのも持ってるよ」と言っていた。駅員さんグッズみたいなおもちゃかな?K保育士「みんな、意外とパスモとかじゃないんだね。じゃあ、きっぷとかもつくりなくっちゃね」とポロリと言ってしまった。確か…。するとMちゃん「パスモ!パスモいいね!」実は、保育士の話し合いでパスモの話は出ていたのだ。遊具をパスモにしてピツとして乗っている子どもたちの姿があったから、作ってもいいかもねとは話していた、そしたら、RちゃんもKくんも「パスモはしかくにきって～」なんて、話が進んでいってしまっている。まあ、いいか。各グループの子たちのマークを(年長児が描いて)世界で一つだけのパスモを作ることに!

<考察>日頃あまり自分の意見を言わないRちゃんが自分なりのイメージをしっかりと持っていることが分かり、保育士はそのイメージを大切にしたいと考えつつ、自分の感想を口にする。その意見をRちゃんたちが膨らませ始めたことに「ポロリと言ってしまった」と慌てている。あくまでも保育士は、子どものイメージを具体化していく事を大切にしよう意識しているのだが、保育士の発言を引き継ぎ子どもたちが楽しそうに考え続けている姿を「まあ、いいか」と一歩引いて見守っている姿が見られる。

3-2 あこがれについて

これまでの事例研究の中で、主体性を育むという事に関連し、人間関係の中での「あこがれ」が目ざされている事が明らかになってきた。しかし、同じ「あこがれ」という言葉についても、持っているイメージには相違があるように思われる。保育の内容や保育士の目的にも関わってくる問題であるので、取り上げて考察していく。

問題と目的でも取り上げたが、無藤(2016)は育成支援の工夫として、コマ回しの活動を取り上げ「意欲や興味をもつためには、保育者が教えるより年上の子どもがじょうずに回すのを見て憧れの気持ちを抱

かせるのが効果的であろう。』[※]と述べている。この際の「あこがれ」対象は、主として「コマがじょうずに回せること」に憧れの気持ちを抱くという事であると考えられる。できるようになることが第一の目標であり、そのために「効果的に」年上の子どもの存在を利用している。それ自体も一つの考え方であるかもしれない。しかし、異年齢保育の中での「あこがれ」は、事例から見られるようにできるからというばかりではない様に思われる。

第50回全国保育団体合同研究集会(2018)の異年齢保育の分科会で「異年齢保育における憧れは、意外なものであることがある。ある年長児がお弁当持参の日に必ずバナナ1本を持ってきているのを見ていた年中児が、その年長児が卒園した後のお弁当にバナナを一本お弁当に持って来た」との発言があった。更に「異年齢保育における憧れは、やってもいいし、やらなくてもいい憧れである」という主旨の発言が続いた。できる事に憧れるだけでなく、より身近な存在として興味を持って「観察してみることに、若しくは観察してみないこと」も、「真似てみる、若しくは真似てみないこと」もそばにいる子どもの自由である。異年齢保育の中での「あこがれ」は、課題ができる年上の子どもの姿を大人が意識的に見せることではない。生活の中で自然に身近にいる対象の、どのような姿に自分を重ね憧れていくのかの選択は、見ている子どもの側に自由が与えられている。大人の意図が加えられた憧れ対象ではなく、自分で決めることができる憧れが、より主体的な意欲につながっていくと言えるのではないだろうか。

できる・できないという結果を過度に気にし、囚われている現代の保育・子育て環境の中で、その事が重圧となり意欲を維持することができない子どもの姿が保育士から語られることが近年増えている。具体的には、取り組む前からやろうとする意欲を持たずに「どうせ、できないから」としり込みする姿などが挙げられている。周囲の大人が自分でやろうとする意欲を引き出そうというねらいを持ってできる子の姿を見せても、このようなケースはなおさら自信を失い動こうとしない場合が多い。子どもに「やりたい」という意欲と「やれるはず」と自分を信じていることができる意識を自然な形で育むことは、現代社会の中で重要な課題である。その一つの答えが、異年齢保育の実践の中で明らかになってきている。つまり、あそびを中心とする活動の中で、身近に年上の子どもが行う事や行事を経験し自分の中に蓄積していく事である。イメージを持つことやそれを実現するための協同の作業について、どの子もためらいなく取り組めるようになっていくのではないか。障害を持っている子、月齢の小さい子、家庭的に安定することが難しい条件を持っている子など、同学年の関わりの中では困難を感じがちな子どもに対しても有効であると考えられるが、更なる考察を重ねていく必要があり、今後の課題としていきたい。

できる事だけが目的なのではなく、それぞれの発想や思いを認め合い自分たちも楽しみを追求しつつ、小さい子など仲間の楽しむ姿を喜びとして取り組むができるものが、年長児の主体性を育む活動になり得ると言えるだろう。

4 まとめ

本研究では、年長児の主体性を育む保育内容の中で、対大人・対仲間などの人間関係の視点から活動のあり方を考察してきた。その中で、育ちを単発の行事のみで考えるのではなく、それまでの活動のあり方や人との関わりとの積み重ねが重要であることが明らかになった。以下、子どもにとって、及び活動を構成していく保育士にとって必要と思われることを挙げていく。

まず、年長児にとっては異年齢保育の中で長い年月をかけ活動を繰り返し経験することでイメージが持ちやすくなり、それを仲間や保育士にためらいなく伝え、実現のために協同し工夫して取り組んでいける活動が必要である。更にこの中で、年長児自身の様々な育ちを育み、子どもの変化を導き出すことも可能となってくる。環境の条件として以下の点が挙げられる。一点目には、人間関係を密に紡いでいける恒常的な異年齢保育の中で、日常の生活を共にすることでお互いを理解し信頼関係が築かれているということである。二点目には、関わる期間が長くなる、構成年齢の巾が大きい異年齢保育であることである。年下

の子たちは大きくなりたいという意欲を育み、身近な存在としてモデルとし憧れていくと言える。

子どもの主体性を育む保育のあり方を考える上では、保育内容を構成していく保育士の意識の持ち方が大きな影響を与えと言える。では、保育士はどのような意識を持っていくべきであろうか。事例からは、以下の点が明らかになった。一点目には、まずは子どもたちの意見や発想が出るのを待ち、それを尊重しようとする事である。その実現の可能性を一緒に考えようとしている姿は実践記録の中に多く見られた。年長児に限らず子どもたちの主体的な姿を見出し、それを一貫して肯定的に受け入れていこうとする姿勢が子どもたちに伝わり、更に主体的な姿へと繋がっていくと言える。そして、二点目には、保育士同士が子どもたちにどのような活動を保障したいと考えているのかを丁寧に共有し、共通の視点で見ることや同じ方向性での関わりを行い連携していく事である。保育士も、それぞれぞれの意見や意欲を尊重され、より保育を楽しみ意欲的になっている姿が挙げられており、複数の保育士が保育していく優位性を発揮していく事が大切だと言える。

引用文献

- i 吉葉研司(2006)保育小辞典, 大月書店, 73-74
- ii 高嶋景子(2015)保育用語辞典〔第8版〕, ミネルヴァ書房, 56
- iii 前掲(i)
- iv 前掲(ii)
- v 宮里六郎(2014)「子どもを真ん中に」を疑う, かもがわ出版
- vi 川田学(2018)日本発達心理学会・関東甲信越地区シンポジウム「異年齢教育と発達」発表資料「異年齢」のなかで何を見るか, 12
- vii 伊藤シゲ子(2018)第50回全国保育団体合同研究集会報告集, ちいさいなかま社, 73
- viii 北相模美恵子(2015)異年齢保育の教育的意義—テキストマイニングによる保育士の語りの分析から—, 明星大学通信制大学院研究紀要教育学研究, 明星大学通信教育部, 13-21
- ix 前掲(vi)
- x 湯立(2016)新版 保育用語辞典, 一藝社, 207
- xi 阿部和子 前掲(ii), 308
- xii 古賀松香(2016)第1章 乳幼児期の育ちと領域「人間関係」, 実践事例から学ぶ保育内容 社会情動的スキルを育む「保育内容 人間関係」乳幼児期から小学校へつなぐ非認知スキルとは, 北大路書房, 12-13
- xiii 無藤隆 前掲(xii), 10
- xiv 前掲(xii), 10